
幻想兎戯

空野 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想兎戯

【Nコード】

N7116C

【作者名】

空野 葵

【あらすじ】

その場所には、死ぬと自分の理想郷に行けるといふ伝説があつた。そこは、神が気まぐれに創つた幻想空間。愚かな人間達は、例えば権力者に、女優に、大富豪にと願うが、そこには衝撃的な結末が待っていた…。オムニバス形式で綴る、切なく歪んだ夢物語。

第一幕

その交差点では、事故が絶えなかった。なだらかな坂の途中にあり、決して見通しも悪くはない。誰もが首を傾げた。しかしその交差点には、ある伝説とも言うべき噂があった。曰く、「そこで生を終えると、自分の理想郷へ行くことが出来る」と。

++++

「ねえ、昨日もあつたみたいよ。死亡事故！」

「えー、でも今月に入ってもう3人目じゃない。やっぱり呪われているんじゃない？」

「やだ、あそこ通学路なのに」

春の穏やかな昼休み。しかしその高校では、一つの噂で持ちきりだった。生徒らが通う高校から僅か300mほどの場所に、その交差点がある。「菜の花交差点」その可愛らしい名前とは裏腹に、今まで数え切れないほどの人間が命を落としてきた。「魔の交差点」そう呼ばれるのに、時間はかからなかった。

ばっかみたい。

噂話に花を咲かせるクラスメイト達を横目に、少女 鈴木まりあはため息をついた。

退屈な日常

昨日も今日も明日も、同じような日々

変わらない自分

いいではないか、あの場所で死んで自分の理想郷に行けるのなら

ば。まりあは昨日命を落とした人を、少し羨ましく思った。もちろん、伝説通りに誰しもが理想郷に行けるなんて子供染みたことは思っていない。ただ、火のないところに煙は立たない。そう考えたのだ。

行きたい。自分の理想郷へ…

放課後、まりあは「魔の交差点」に足を運んだ。車もそれほど多くない道路の隅で、ぼんやりと交差点の中心を眺める。気のせいかな、血痕が残っているように思えた。

本当に死んだら理想郷に行けるのだろうか。試してみたい。でも死ぬのはやっぱり怖い…

まるで魅せられるように交差点を凝視していたまりあは、気づかなかった。トラックが猛然と突っ込んで来ることに。

+++++

「マリア様、お目覚めですか？」

「ん……」

ゆっくりと瞼を上げる。豪華としかいいようのない景色が飛び込んできて、まりあは目を見開いた。声をかけた女性が微笑んで、柔らかなベッドから身体を起こすのを手助けする。

「おはようございます。朝食のご用意が整っております。それから朝食後、旦那様が応接室へ来るようにとのことです」

「……分かったわ」

まりあは唐突に理解した。というか記憶が入り込んできた、とい

う方が正しい。贅沢なドレスに着替え、侍女が退出したのを見届けた後、まりあはシートで口を押さえ狂ったように笑った。

ここが私の理想郷！ 私は大国の大貴族の一人娘、マリア「ロゼス」コウルダー！！

優雅な動作で朝食を取る。貴族のマナーは身体に染みこんでいて、何の心配も要らなかった。先程鏡を見たときは驚いたが、確かに自分の顔なのに髪と目の色が明るい茶色に変化している。それは元々整っているまりあを、余計に美しく見せていた。ほんの少し微笑むだけで、大抵の人が赤くなるほどに。

金も美も地位もある。まりあは有頂天になった。

「おはよう、マリア。今日も綺麗だよ」

「おはようございます、お父さま」

朝食後、屋敷で最も贅を尽くした応接室へ向かう。そこには優しいそうな父、コウルダー伯爵がソファに腰掛けていた。その向かいには、父と同年代だろう口髭を生やした男が、無表情でこちらを見ている。

不審に思いながらも優雅な礼は忘れない。殊更上品に振舞って見せると、相手も慇懃な礼を返してきた。父はこれ以上ないほど嬉しそうに、その男を紹介する。

「マリア、この方はドウユル公爵様だ。お前の婚約者に当たる。一ヶ月後に婚姻の式を盛大に挙げるから、そのつもりで準備するように。公爵様、どうぞ娘をよろしくお願い致します」

「……ああ」

え……？

今…父は何と言った？ 婚約者？ 婚姻？…この敵めしい髭の男と！？

「お…父さま、これは…」

ありえない。これは私の理想郷なのに、私の世界なのに！

真っ青になるまりあを緊張のためだと勘違いした父は、丁重にドウウル公爵を送り出した後、まりあに優しく話しかけた。

「マリア、突然で驚いたかもしれないが、ドウウル公爵とお前は、5年前からの婚約者だ。あの方が前王の義弟君であることは知っているな？ ドウウル公爵は長い間奥様を持たれなかったが、5年前にお前を見初められてな。お前が16になるのを待っていたのだ」

これで我が伯爵家も安泰だ、という父の声は全く耳に入らなかった。どうやって自室に戻ったのかは覚えていない。気がつくと、まりあはベッドに潜り込んで嗚咽を漏らしていた。

前王の義弟、確かに貴族の娘としては申し分ない相手だろう。だがまりあには嫌悪しか感じられなかった。おそらくドウウル公爵とやらは40歳前後、そして自分は16歳だ。しかも見初められたのが5年前だとすると、完璧に幼女趣味ではないか！

まりあは憤る。こんなはずではなかった。理想郷は、もっといい場所のはずだった。どうしてこのようなことになるのだろう。この世界を動かすのは私ではないのか！？

控えめなノックの音がして、まりあは急いで涙を拭う。ひどい顔

であることは分かっていたので、ベッドのカーテンに隠すようにした。そして小さく返事を返すと、朝の侍女とひとりの青年が入室して来た。青年はどうやら騎士らしく、剣を腰に佩いている。侍女が弾んだ声で言った。

「マリア様、ドウウル公爵様との御結婚、おめでとうございます！
そして今日から一ヶ月間、マリア様の護衛をする者を連れて参りました」

「護衛……？」

「はい、王族へ嫁がれると決まったからには、危険が無いとは限りません。それで旦那様直々に、腕の立つ騎士をお選びになったのです。さあ、ご挨拶をなさって下さいませ」

侍女の言葉に頷いた青年は、ベッドに近づき、片膝について頭を下げた。

「貴女様の護衛が出来ることを光栄に思います。サイア＝ヒュールと申します」

凜々しい声に、まりあの肩が震える。そして顔を上げた姿を見た時、まりあは一目で自分の感情が燃え上がるのを悟った。

「お嬢様！　大丈夫ですか！？　お怪我は！」

サイアが血相を変えて駆け寄ってくる。まりあは転んだ　振りをした　身体を懸命に起こそうとするが、その前にサイアの手が差し伸べられた。「ありがとう」と、にっこり微笑んで身体を預ける。

決して自分に触れようとしないうサイアと、唯一触れ合えるこの瞬間。まりあはサイアを騙していることに罪悪感を覚えながらも、ひとときの幸せを噛み締めていた。

凛々しく、強く、優しい青年…サイアはまさに、まりあの理想そのものだった。出会ったあの日から、7日が経ったが、狂おしい想いは募るばかりだった。髭の公爵も何度かまりあを尋ねて来たが、まりあは何の感情も抱かなかった。

そして二人が出会ってから矢のように時は過ぎ、30日目…とうとうその日が来た。純白のドレスを着て、髭の男の横に並ぶ。誓いの言葉を言う時は、悲しさで涙が出そうだった。幾度も逃げ出そうとしたが、その度にサイアに止められたのだ。サイアは私のことを何とも思っていない…。そのことを痛いほど理解した。

心が悲鳴を上げる。いつしかまりあには、ここが理想郷ではなく牢獄だと感じるようになっていた。

その夜公爵家へ引き取られたまりあは、広大な屋敷の中で、必死にサイアを探していた。彼はまりあを公爵家へ送り届けるまでが任務だと聞いていたので、もしかしたら会えるのではないかと思ったのだ。そして。

「サイア…！」

縋るように、今にも玄関から退出しようとしている青年を呼び止める。ドウユル公爵は、まだ宴会の場にいるようだ。会場から、人々の騒ぐような声が聞こえている。

「お嬢様…？」

「お願いっ、ちょっと来てほしいの！」

強引にサイアの腕を取り、与えられた自室へと向かう。使用人と擦れ違わなかったことは幸運だった。急いで扉を開けると、困惑する青年に抱きついた。

「サイア…あなたのことが、好きです…」

精一杯の想いを込めて、言葉を紡ぐ。そして呆然としているサイアにキスをしようとした…その時。

「これはこれは…我が花嫁殿が既に愛人を囲っているとは」

後ろから聞こえる、侮蔑を含んだしゃがれ声。

酒を片手に扉を開け、こちらを無表情で見つめているのは、今日からの夫…ドウユル公爵だった。

「あ……！」

一気に血の気が引き、顔は真っ青になり、床に崩れ落ちた。サイアは慌てて膝をついたが、もう全てが終わったことは、誰から見ても明らかだった。

今 まりあは、冷たく暗い牢獄に繋がれている。サイアがあの場合で処刑された時、彼女の心は死んだ。そして彼女も、いつ来るか分からぬ処刑人をただ待つ日々…。

「早く…死にたい。この牢獄のような世界から、早く…」

ふいに数人の足音が聞こえてきた。ここへ来るのを許されるのは、
一人の侍女と、処刑人のみ。まりあはようやく訪れようとしている
「終わり」に、静かに微笑んだ。

++++

「くくく…本当に人間とは愚かなものだ。自分で理想郷を創りなが
ら、自ら規則に縛られる」

薄暗い空間で、男が静かに笑った。いや、嘲笑した。

「だが…今回もそれなりに楽しめた。次は…ああ、こいつか。こい
つはどのような幻を望むのか…」

伝説には、続きがあった。「理想郷へ行ったものは、必ず悲運を
辿る」

このことを知るものは、現実世界には存在しない。

そして今日も、その交差点では事故が絶えない…

第二幕

「打球は伸びるっ、伸びるっ、入ったあゝ！！ 入りました！ 逆転サヨナラ満塁ホームラン！！」

「くそっ！」

栗原聡はラジオを殴るように消すと、悪態をついた。これで3年連続、応援する球団の最下位が決定した。仕事帰りの車の中、イライラする気持ちは容易には収まりそうにない。聡は窓を開けて、既に更けた夜の風を受ける。

「どいつもこいつも…ちくしょう！！」

就職のために田舎から出てきて5年。都会の風は厳しかった。慣れない仕事に懸命に取り組んでも、全く評価されない日々。田舎で暢気に野球を楽しんでいた頃が、無性に懐かしく思えた。

目の前の信号が赤になり、聡はまたも憤りながらブレーキを踏む。その時、ふと目に付いたものがあつた。

「ん…？ 菜の花交差点…ああ、これか」

だいぶ前に、同僚から聞いたこの交差点の噂。もちろん信じてないが、もうすぐ日付が変わろうとするこの時間に、自分だけ存在するこの交差点は何やら不気味にも感じた。噂は信じていないが、この場所で死者が多いのは事実だ。

「ふん、ばかばかしい」

そうは言ってみたものの、なかなか変わらぬ信号に焦れ、聡はア

クセルを踏んだ。見通しがいいこの交差点。横から来る車は何百メートルも先から見える　はずだった。

「うわっ！！」

しかし今、聡の車に横から突っ込もうとしているのは、ありえない存在のダンプカー。音も、気配も全くしなかった。気づくと横にいた　そんな感じた。耳をつんざくような音がして、聡は気を失った。

++++

歓声が、聞こえる。

ゆつくりと目を開け、打席に立つ。自分の名前が連呼され、何万もの観客はますますヒートアップした。

『4番、サード、栗原聡。背番号17』

アナウンスが終わり、聡はバットを静かに構えると、相手投手を睨んだ。そして一球目…。球場が静まり返る。僅かバット一振りです、試合は決した。6 - 5、サヨナラホームラン。ガッツポーズをし、ダイヤモンドを小走りしホームに還ると、チームメイトにもみくちゃにされる。報道陣が、我先にとインタビュを試みってくるのをかわし、観客の一人と握手をした。悲鳴が起きる。

強豪プロ野球チーム、山陰スネークスの4番バッター。それが、栗原聡の姿だった。

「おめでとございます！　今シーズン、記念すべき50本目のホ

ームランは劇的なサヨナラホームランでした。今のお気持ちをどうぞ！」

「絶対に負けられないと思って、無我夢中で打ちました。運よく入ってくれて、本当にラッキーでした」

「謙虚ですねー！あのホームランは、栗原選手しか打てませんよ！では、最後にファンの皆さんに一言お願いしますー！」

「えー、今日も応援ありがとうございました！勝てたのは皆さんのおかげです。これからも応援よろしくお願いしますー！」

試合後のヒーローインタビュー。聡は精一杯「良い人」を演じた。誰もが聡を絶賛し、褒め称える。家に帰り一人になった後、聡はとうとう堪えきれずに笑い出した。

「ははははっ、これが本来の俺の姿……ここからが、俺の本当の人生だ……！」

未来は、明るい。

翌日。

「栗原さん、今日もスポーツ紙一面に載ってますよ！うらやましいなあ」

「はは、偶々だよ」

朝の個人練習。休憩室にいた栗原の元に、昨年プロ入りした後輩の溝口が寄って来る。まだ二軍にいて、今のところは害の無い人間だ。少なくとも、4番の座を脅かす程の才能はない。

すると、後ろから聡が持つ新聞を眺めていた溝口が「あっ」と叫んだ。

「何だ？」

「この記事…知りません？ 栗原さん。去年の甲子園で優勝投手になった高校生！ まさかジャガーズに入団するなんて。大学に入学したはずなのに」

「甲子園…ああ、あいつか、杉江とかいう」

一瞬焦った聡だが、その時の記憶が浮かんできた。確か中継のテレビを見ていたはずだ。ここがあの理想郷なのか、天国なのかなんてどうでもいい。自分が認められる世界なら、地獄だって構わない。だから、その高校生が長年のライバルチーム、東海ジャガーズに入ろうがどうだっていいのだ。

その日のチームも快勝し、聡は満足して家路に着いた。不安なことなど、何もなかった。

「………に入ることが出来て、とても嬉しく思います。精一杯努力します」

夜、テレビをつけた瞬間、少年、いや青年の声が飛び込んでくる。画面右上の見出しを見ると、『杉江投手入団会見』と書かれていた。まだまだガキじゃねえか。そう思いながら何ともなしに画面を見る。解説を聞くと、どうやら今シーズン成績が芳しくないジャガーズが、大学にいた杉江を強引に引き抜いたらしかった。

そして、インタビューは大詰めを迎える。

「では最後に、憧れの選手や、一度対戦してみたい選手の名前を教えてください」

「そうですね…一度対戦したいのは、山陰スネークスの栗原選手です」

記者団から、「おおっ」という声上がる。大半が、「無謀な奴

だ」という響きを持っているのだろう。

それだけ、栗原聡という野球選手は群を抜いていた。

面白いじゃねえか。

聡の口角が上がる。負けることなど、あり得ない。絶対に。

「返り討ちにしてやるよ」

聡は、画面の中で笑う杉江に向け、にやりと笑った。

一カ月後、シーズンも終盤に差し掛かり、スネークスの首位はキープされている。優勝は確実で、それに比例してか聡の成績も目を見張るものがあつた。打率4割3分7厘。65HR。常人には考えられないような数値だが、本人は至つて普通のことと受け止めている。まるで球がバットに吸い寄せられるように向かつて来るのだ。当てられないほうがおかしい。

そして今日からの3連戦は東海ジャガーズとだが、試合はすでに決して…いや決しようとしていた。8回のウラ、同点のままスネークスが二死満塁とし、次打者が栗原。観客もリポーターも、相手チームでさえも聡が打つと信じている。その時だった。

『只今の投手に代わりまして、36番、杉江』

どよめきが起きる。既にバッターボックスに入っていた聡も驚く。何より、このピンチを新人投手 しかも、初マウンドの奴に任せるということに。ジャガーズはこの試合を捨てたのか…？

しかし。

「ストライクー!!」

え…？

「ストライクツー！」

何だ？ 何だこの球は！？

「ス、ストラーイク！！ バッターアウト」

場内が静まり返る。聡は一步も動けずに、呆然としていた。信じられなかった。あの左腕から放たれる球は、聡に反応することさえも許さなかった。

どういう、ことだ？ ここは、俺の、世界…？

「くそっ！！」

飲み屋をハシゴし、深夜に帰宅した聡は机を勢いよく蹴り上げた。これで、明日の新聞トップは杉江で決まりだろう。何しろ、この「自分」を三振に取ったのだから。ソファァーに倒れ込み、深呼吸する。

「まだ、負けた訳じゃねえ…」

そうだ、たかが一打席、何だというんだ。次は、HRをお見舞いすればいいだけだ。

聡は自分にそう言い聞かせると、そのまま眠りにつく。…悪夢の、始まりだった。

ロッカーを殴る音が響き渡る。チームメイトがこそこそと出て行くのを横目に、聡は悪態を吐いた。

21打数0安打、ありえない失態。監督も、初めは「疲れてるのか？」とからかわれる程度だったのが、今では不審な目で自分を見る。

打てないのだ、どうしても。バットが動かない。あの球が、頭を過ぎって。杉江とは、あの一回しか対戦していないのに。

「ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょう……！！」

誰が悪い？　自分が悪い？　…そんなことはない。悪いのは……
杉江だ。^{あいつ}

「……そうだ。悪いのは、全てあいつのせいだ」
俺の世界に、勝手に入ってきて来るから。

次の対戦は、およそ2週間後。
「見てろよ…杉江」
聡は暗い笑みを浮かべた。

許さない。俺の世界を、壊す奴は。

歓声が、聞こえる。
だがそれは、自分に向けられたものではない。ジャガーズのファンが、マウンドにいる杉江に送っている声援だ。しかし聡は、それに愉快ささえ感じた。

「今日限りで、お前の投手生命は終わるんだからな」
聡は、バッターボックスに向かいながら、低く呟いた。

そろそろ、効いてくるはずだ。苦勞して手に入れた全身に麻痺を起こさせる「毒」が。致死量ではないが、一生痺れが残るのは明らか。執念を注ぎ込んで、用意周到に準備した。ばれる心配は絶対に

ない。マスコミは、食中毒だと騒ぎ立てるだろう。

後は、自滅するのを待つだけだ

『7番、サード、栗原聡。背番号17』

バットを構え、相手投手を見る。顔が青いのはすぐに分かった。それでも杉江は懸命に肩を動かし、投球動作に入る。だが、左腕が耐え切れず思い切りぶれ……

「え……？」

聡は信じられないという様に、球を凝視する。
投げられた球は一直線に聡の頭部に向かい………鈍い音がした。

+++++

「……ああ、こいつの『幻』も終わったか、案外つまらぬものだったな」

男は少々不機嫌になり、今まで眺めていたものを一瞬にして消し去った。

「ほう……次はこいつにするか。退屈しのぎには、なるだろう」
犠牲は、止まらない。

そこは「菜の花交差点」。
人の欲と命を弄ぶ場所……

最終幕

「ご臨終です」

医師が冷静に告げる声に、有紀は呆然と立ち尽くした。目の前には、愛しい婚約者の姿。数時間前までは共に笑っていた彼が、無惨な姿で横たわっていた。

「う…そ…」

震える手で、彼の髪をなでる。ふいにべたつく感触がして指を見た。指についたのは、…血。有紀をかばってトラックに飛び込んだ、彼のもの。

「いや…いや　　！！」

冷たい病院の床に倒れ込む。いつそのまま、後を追いたいと思った。

「かわいそうに…彼女、天涯孤独の身らしいわよ」

「これからどうするのかしらね」

「亡くなった方の親戚も、遠縁ばかりらしいじゃない」

葬儀会場を抜け出し、ふらふらと街中を彷徨う。化粧はぼろぼろ、髪はぐしゃぐしゃ、そして全身黒の服のおかげで行きかう人々から

好奇の目で見られている。ただ、有紀にはそんなことは関係なかった。

思うことはただ一つ。「会いたい」と。

「じじは……」

何も考えていなかったはずなのに、夕暮れが迫る頃辿りついた場所、菜の花交差点だった。有紀は一瞬目を見張るが、次の瞬間極上の笑みを浮かべる。

「ここならきつと……」

あなたに会える。

有紀は『菜の花交差点』と書かれたプレートを愛しげになでると、帰宅ラッシュで混み合う交差点に身を投げた。

+++++

「ユキ！ お客さんだよっ」

「はいっ」

三年後、有紀は異世界の小さな村、イエンカにいた。森で倒れていた有紀を助けた人が宿屋の女主人であり、言葉も分からなかった有紀を見捨てずに養い、家族同然に接してくれている。そして有紀はささやかな恩返しにと、人手不足に悩む宿屋で働いているのだった。

「ご注文は？」

「俺はセンジュと野菜炒め。こっちはクツパを頼む」

「はい、お飲み物は？」

初めは心細さと彼が恋しいのとで泣いてばかりいた有紀だが、今では宿屋の看板娘として日々忙しくしている。もちろん彼のことは一日たりとも忘れたことはないが、生まれて初めて出来た『家族』に喜びを感じていた。

「おかみさん、センジュと野菜炒め、それからクツパを…おかみさん？」

厨房へ戻ったが、豪傑な女主人こと、マーテルの姿が見当たらない。有紀は店全体をぐるりと見渡し、隅に陣取っている集団へ近づいていった。

「…やはりそうかい」

「ああ、ここから二日もすりゃ行ける街が壊滅状態になってやがる。奴らの仕業だ」

「ここにも来るなんていわねーよなあ」

「バカ野郎、そんな訳ねーだろが！」

「……おかみさん？」

ひそひそと話しをする集団の中に母親代わりの人を見つけた有紀は、怪訝そうな顔で覗き込む。マーテルの顔が、今までにないくらい厳しいものになっていた。

「一体どうしたんですか？」

「ユキ、今日はもう店仕舞いだ。すまないが、二階の客にもそう言っておくれ」

マーテルはそれだけ言うと、その大柄な姿で次々と店内の客を帰らせ始めた。ユキはあつけにとられて見ていることしか出来ない。

一刻ほど経ち、店内が粗方片付くと今度は身の回りのものを纏めると言われる。ユキは不安になりマーテルに詰め寄った。

「おかみさん！ どうしてこんなことをするんですか！？ 何が起ころの？」

「ユキ、良く聞いておくれ。隣国のハツシュで内戦が起こっているのは知ってるね。もうハツシュは崩壊寸前だ。それでその軍が暴徒化して、国境を越えてきているらしい。……もうあの国には食糧もないだろうからね」

「そんな…それじゃあこも」

「そういうことだ。準備が出来次第、ここから離れるよ。少し遠いが、西方の街に知り合いがいる。そこを頼るつもりだ」

ユキは呆然とした。確かにここはハツシュの国境から近い場所にある。しかし第二の故郷ともいえるこの場所を離れるのはつらい。それに、やっと打ち解けられた村人たちと離れ離れになるのが耐えがたかった。

「でも、私は……」

思わず泣きそうになり、慌てて下を向く。すると家の外から村人の悲鳴がして、二人は飛び出した。

「馬鹿な……！！」

マールテルが呻くように言う。目の前には、村人の十倍はいるだろう兵士達がずらりと並んでいた。どの兵士もぎらぎらとした目をしていて、薄汚れている。微かに見える甲冑の紋だけが、彼らをハツシュ国の者だと証明していた。

イエンカ村は、占拠された。

++++

「もう食糧はねえのか！？ 隠した奴は殺すぞ！！」

兵士の殺気立った怒号が響き渡る。ユキを含め村人たちは全員小さな小屋に詰め込まれて監禁されている。恐怖のあまり泣き喚く子どもを、兵士は乱暴に殴った。

「うるせええつ！ 黙れ！！」

そして更に暴行を加えようとする兵士。ユキは咄嗟に子どももの前に出て庇った。まともに頬を打たれ、唇から血が伝う。よろける足を懸命に踏ん張った。

「きさま……」

一瞬怯んだ兵士だったが、すぐにそれは怒りに変わりユキに向けられた。武器を取り出す相手を見て、ユキはここで一生が終わるのだと感じた。

確かに私はあの時一度死んだ。でも、出来ればもう一度だけ、あなたに会いたかった……

周囲から悲鳴があがる。ユキは静かに目を閉じた。その時だった。

「おい、その辺にしておけ」

声が、聞こえた。あのヒトの、声が。

ユキはぱつと上を向いた。そこには逆光で顔は見えなかったが、馬に乗った兵士がいた。

「でもよう、ジン」

「いい加減にしるサンガ、この国の軍に場所を特定されないうちに
出て行くぞ。女を殴るヒマがあったら食糧を積み込め」

どうやらまとめ役の男らしく、サンガと呼ばれた兵士は渋々ながらも従う。後ろの村人からはほつとしたようなため息が漏れるが、ユキはそれどころではなかった。

「純也……さん……」

目も、口元も、少し角ばった頬も、全てあの人にそっくりだった。いや、あの人そのものだった。震えるユキの声が聞こえなかったのか、ジンはそのまま立ち去ろうとした。それを、精一杯の声で引き止める。

「待つてっ、じゅ、純也さん……！」

ジンが振り返る。

「置いて……行かないで……」

もう二度とあんな思いはしたくない。涙を流すユキに、ジンが怪

訝そうに近づいてくる。

「何だ、えらい美人じゃないか、おい、俺らと一緒に行くか？ 可愛がつてやるぜ」

からかうようにジンがユキを見た。優しい婚約者などとは似ても似つかぬ暴言。しかしユキの全身がこの人と離れたくないと叫んでいた。

「……………はい。連れてってください」

「ユキ！ 何を…！？」

訳が分からないという風にマールテルが叫ぶ。当然だろう、自分たちの村を略奪した盗賊同然の男についていくというのだから。しかも身の安全の保障など、ある訳がない。邪魔になれば殺されるのは目に見えていた。でも、それでも。

またこの人と離れたら、今度こそ私は狂ってしまうから。

「へえ…そんなこと言うのはあんたが始めてだが……………いいぜ、後ろに乗れよ。名前は？」

「……………ユキ」

「ユキ、ね。まあ今回は面白いもんが手に入ったから村人の命は助けてやるう。おい、引き上げたっ！」

ぐいっと手を引かれ、馬の背に荷物のように乗せられる。そしてそのまま馬は走り出した。呆然とする村人たちを横目にして。

「次は西へ向かう！ 遅れるなよっ」

兵士に指示するその背に、ユキはそろそろとしがみついた。例えば明日殺されても構わない。これからどんな運命が待っていても、いい

「純也さん……」

ユキは、涙を流した。

++++

三カ月後、国を荒らした盗賊団が捕縛された。一人残らず処刑されたが、何故か一人だけいた若い女は、幸せそうな死顔だったと言

++++

「珍しいな、お前がこんな結末を許すなんて」

からかうような声。

「別に……飽きたただけだ」

男は少し不機嫌そうに返す。

「そうか、じゃあまた次の遊戯あそびを探すとするか」

「ああ……」

『菜の花交差点』、そこが地獄の入り口として開くことは二度とない。しかし確実に、次の門が開けられようとしている……

カミノキマグレハ、マダオワラナイ。

最終幕（後書き）

本当はもっと続けたかったのですが、暗い話に自分が耐えられませんでした。本当にすみません。読んで下さった方々に感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7116c/>

幻想児戯

2010年12月10日18時09分発行